シンポジウム
ー「同志社にとっての **1876** 年」ー

女学校の開校

工　藤　尚　子

はじめに

同志社の創立が「1875 年 11 月 29 日」を自明のこととして共有されているのに対し、女学校の開校の起点をどこに求めるかという点については複数の観点があります。

この論考では、専ら本井先生のお書きになったものをベースに女学校開校の経緯をまとめた上で、「この出来事をもって女学校の開校とする」と言えそうな時点について、特に 2 つの案に焦点を当てて検討してみたいと思います。

後に詳しく述べますがこの 2 つの案というのは、現在主に同志社女子中高が準じておられるものと、同志社女子大学が準じておられるものです。つまり女子部の創立を巡っては、学内で 2 つの基準が並立しているということです。「女子中高と女子大で、女子部の創立を記念するタイミングが異なっている」というこの現状をどう捉えるか、様々なご意見があるでしょう。「並立していても、それぞれに思うところに従っておいて良いではないか」というご意見もあるかもしれません。ですがここでは、両者の間で何らかの一致を目指すのが望ましいのではないか……という観点から検討したいと思います。この目指すべき「一致点」についても、主に本井先生のご提案に沿う形でご紹介した上で、中高教員という「現場」の視点から私見を少し加えてみたいと思います。

私自身は 1994 年に同志社女子中学校に入学して以来の「同志社歴」です。2000 年に同志社大学神学部へ進学し、大学院修了後すぐの 2006 年から現在

の同志社香里中高に聖書科専任教員として入社しました。

女子部で育てていただいたこと、そして、同志社に「加わった」学校である香里中高に勤めてきたという私の経歴が、このテーマと不思議な繋がりを持っています。研究の機会をいただいたことは、私自身のアイデンティティを尋ねる旅にもなったような気がしています。

女学校はいつ誰がどこで始めたのか

さて本題は、私にとって母校と呼ぶべき女子中高の原点、同志社女学校の開校を巡ってのお話ということになります。一言でいえば「女学校は、いつ、だれが、どこで」創設したのかという問題です。

男子校である同志社英学校の方は「1875 年 11 月 29 日創立」ということでほぼ異論無く共通の認識があります。一方、女学校の創立記念日を巡ってはいくつかの主張が存在し、それぞれの主張には各々それなりの根拠があり、また互いに幅があります。女子中高は長らく 4 月 21 日を「女子部創立記念日」として、特別礼拝などの行事を行っていますが、女子大ではまた違った形で認識されているようです。

それぞれの立脚点を示す前に、女学校設立前後の出来事を時系列に沿って概観してみたいと思います。

まず 1875 年の 11 月 29 日に、男子校である同志社英学校が「開校」しました。ここで言う「開校」は「開校の認可が下りた時点」ということではありません。また「自前の校舎で開業された」ということでもありません。仮校舎のような形ではありながら、実質の事業と言えるものが開始された……ということを指しております。ですから、これを「開校記念日」と呼んで良いかどうかには実は異論もあります[1)]。けれども、すでに 11 月 29 日が広く「同志社創立記念日」とされているのが現状ですので、今さらこれを問い直す必要性は極めて薄いと言えます。

翌 1876 年 2 月には、新島の妻八重が宣教師ドーンの妻と共に、自宅で女子塾のようなものを始めたという記録があります。数名の女児を預かるよう

な形であったようですが、これはほどなく、恐らく開始から数か月で立ち消えになってしまったようです[2)]。これを「同志社の女子塾の源流」と見ることもできますし、実際にそのような主張もあるようです。けれどもこの女子塾は「同志社」という体系の中に位置づけられたものではなく、この事業そのものが強く認識された上で後の女子部に継承された……という側面も薄いと言わざるを得ません。以上から、ここではこれは単発の、別個のものとして扱いたいと思います。「この時、同志社の女子教育の種は蒔かれたかもしれないが、芽生えはせぬまま枯れてしまった」という理解です。

同年 4 月には、ウーマンズ・ボードからスタークウェザーが来日いたします。ウーマンズ・ボードは、アメリカン・ボードを母体とする女性宣教団体です。

スタークウェザー来日の背景には、神戸ですでに女子教育の実績を持っていたデイヴィスの働きがありました。デイヴィスは神戸での経験をもとに、京都においても男子校の設立と共に女子教育の必要性があるということをアメリカン・ボードに訴えていたのです。

スタークウェザー来日から約半年後の 10 月 24 日、スタークウェザーを中心として旧柳原邸（デイヴィス宅）で、彼らが「京都ホーム」と呼ぶ女子塾が開始されました。この日付は、開始直後にスタークウェザー自身がウーマンズ・ボードに宛てて報告している書面の中に記載があることから、非常に信憑性の高いものと言えます[3)]。

これだけであれば、女子教育の起点は「1876 年 10 月 24 日」で決めても良さそうなところです。ですがさらにその翌年、1877 年 4 月の学校日誌には、「二十一日に女学校を開設した」という記述があります。これが新島自身による記述とされたことから、「1877 年 4 月 21 日」という日付がクローズアップされることになります。2 つ目の「創立記念日案」の浮上です[4)]。

実はこの学校日誌の記述は、新島ではない別人が後になって書き加えたものであるということが確認されました。その時点で「4 月 21 日説」は、根拠をすでに失っています。この日付を巡る根拠の中で有力と言えるものには、府へ提出した「開業願」があります。ここには「二十二日に提出、二十八日に認可」と記されています[5)]。これに従えば、先の学校日誌の「四月二

十一日に開設」というのは一層信憑性を失うことになります。強いて結び付けるなら、「二十二日に開業願を提出しよう……ということに決めた」のが、前日の 21 日だったということになるでしょうか。

この女子塾は、1878 年に京都御苑内の旧柳原邸（デイヴィス宅）から、現在の女子大今出川キャンパスに当たる旧二条邸址に移転します。宣教師宅の間借りではなく、自前の校舎を持ったと言えるこの時を、創立の起点とする考え方もできます。ただしこの場合、日付については「移転が完了した日」か、移転後に「授業を始めた日か」など、いくつかの案が生まれてきます。スタークウェザー自身は、この移転費用がウーマンズ・ボードによる「アメリカ独立百周年」の記念募金で賄われたことを受け、独立記念日でありかつ「移転完了」時点である「7 月 4 日」という日付を念頭に置いているようです[6)]。

以上、女学校創立を巡る主だった出来事を並べてみました。この中で「女学校創立記念日」として検討すべきポイントを 2 つ挙げます[7)]。

一つは、新島のもと、京都府の認可を求めて、「同志社分校女紅場」すなわち後の「同志社女学校」としてスタートしたとされる「1877 年 4 月」説です。これを「A 案」といたします。もう一つは、スタークウェザーのもと、あるいはその背後にいたデイヴィスを含む宣教師たちのもと、「京都ホーム」として女子塾が立ち上げられた「1876 年 10 月」説です。これを「B 案」といたします。

ちなみに、スタークウェザー自身はこのいずれをも採らず、先述の通り自前の校舎に移転した「1878 年 7 月 4 日」を創立日と見做しています。これを仮に「C 案」と呼びますが、この C 案については現在の同志社、つまり日本の側において支持者がほぼいない状況ですので、この論考ではこれ以上触れません。

そうすると本題である「女学校は「いつ」「誰が」「どこで」創設したのか？」という問いについては、この A 案「1877 年 4 月」と、B 案「1876 年 10 月」が主な論点となります。現在は「女子部」の中においても、この 2

つの案の間で認識のずれがあります。すなわち女子中高においては A 案に、女子大においては特に 90 年代中頃以降から B 案に軸足を置いて「女子部創立記念日」とする姿勢があるのです。

「創立」の捉え方によって生じる違い

A 案 B 案それぞれに当然根拠があるわけですが、どちらを取るかによってどのような差異が生まれるか、という点を整理しておきます。大きくは 4 点です[8)]。

一つはまず創立年です。創立年が変わるということは、「周年」の感覚が変わりますから、これは大きな問題点となろうかと思います。

二つ目は創立当時の名称です。A 案の場合は「同志社」の名が付きますが、B 案の場合は「京都ホーム」と呼ばれていた時代をスタートと見ることになります。

三つめは校長、責任者が誰かということです。A 案では新島が、同志社の名のもとに、京都府に開業願を出していますから、新島が校長として開業したということになります。B 案では、スタークウェザーやデイヴィスといったミッションの宣教師らが主体であって、新島の関与はごく薄い、間接的なものとして捉えられることになります。

四つ目は、認可の有無です。A 案は京都府への開業願を出していますので、認可そのものが下りていたかどうかに若干の日程的な幅はあるものの、「認可を求めて申請した」という事実をもって「正規の開校を目していた」と言えます。それに対して B 案はあくまでも「私塾」の域を出ません。

A 案「1877 年 4 月 21 日」

この四点に沿って改めて A 案「1877 年 4 月 21 日説」を見てみますと、「1877 年」に［創立年］、「同志社分校女紅場（女学校）」として［名称］、「新島を校長」に［責任者］、「認可を受けて（あるいは申請して）」開校した［認可の有無］という主張になります。

女子中高は伝統的にこの日に創立記念礼拝を持っていると先述しました。これを、現在の同志社女子中高の HP から確認してみたいと思います。同志社女子中高 HP 内に「こむらさき通信」というブログのページがあり、こちらがかなりまめに更新されています[9)]。

このブログ内で、なぜか今年（2021 年）の 4 月には言及が無かったのですが、昨年 2020 年の 4 月 21 日には「女子部創立記念日です」と題した投稿があります。実はこの時は新型コロナウイルス感染拡大による全国一斉休校の最中で、「生徒のいない女子部創立記念日は初めてのことかもしれません」と記されています。生徒なし、特別礼拝なしでもこのような投稿がされるのですから、女子中高において 4 月 21 日というのは「自明の日付」であるということがうかがえます。

一方、同じ女子中高の HP 内で、「創立者新島襄と同志社」と題した学校の歴史を紹介するページには、次のような記述があります[10)]。「同志社女子部は、英学校設立の翌一八七六年、京都御苑内の旧柳原邸デイヴィス宅において始まりました」。

「始まりました」という言葉遣いは、「これが女子部の起点」という認識を表しているようにも受け取れます。さらに続けて「一八七七年には新島襄が校長となり」とありますから、「すでに始まっていた女子部において、一八七七年になってから新島が校長職を担った」と語っているようにも読めます。このページがいつ作成されたものか、あるいはいつ更新されたものかは分かりませんが、もしかするとこれは B 案「1876 年説」への配慮を含んだものと言えるのかもしれません。

ところが、生徒手帳の学校沿革概要のページについては、はっきりと「創立　一八七七年四月二十一日」と書かれています。沿革そのものは新島の帰国から記されていますが、別立ての項目として「創立年月日」がはっきり記されているというのは、ちょっと動かし難いものがあります。

中高の学校現場に立つ身としては、この学校沿革のような「毎年チェックして校正する必要の無い頁」については、わざわざ書き直さずに済ませがちな面もあるような気はいたします。私個人がいい加減なだけで、女子中高の

教職員の皆さんはそんなことはないかもしれませんが……。ですがもし「見過ごされて記載され続けているだけ」であるならば、HP とは違ってそういう「B 案への配慮」がまだ反映されていないだけ（書き直す心の準備はある）、という可能性もあります。

女子中高が立脚する A 案についてまとめますと、このようになります。

創立年は 1877 年。これは生徒手帳の「創立」の項目に基づけば、女子中高はこのように理解していると言わざるを得ません。その代わり……と言って良いのか分かりませんが、女子教育スタートの初めの時点から「同志社」です。「分校女紅場」から「女学校」への名称の推移はあるものの、女子教育は「同志社」の名を冠して始められたと言うことができます。

この「1877 年 4 月 21 日を創立日とする」いう理解については、実は 1897 年という相当早い段階から受け継がれてきているということが分かっています[11)]。そうするともはや「4 月 21 日」という記念日そのものが「伝統」と呼ぶべきものになっているとも言えます。

B 案「1876 年 10 月 24 日」

それでは B 案の方はいかがでしょうか。先の 4 点を押さえてみます。

「1876 年 10 月 24 日に創立」と見做すこの立場は、1990 年代以降、宣教師文書の研究が進められる中で、女子大が主として立脚し始めた立場です。この場合、「1876 年」に［創立年］、「京都ホーム（Kioto Home）」という名称のもと［名称］、アメリカン・ボードすなわちミッションによる施設として、デイヴィスの尽力がきっかけとなって招かれたスタークウェザーを「校長」に据えて［責任者］、無認可の私塾の形［認可の有無］で開校したのが女子部の始まり、ということになります。

こちらも女子大学の現在の HP を参照しつつ、女子大学において女子部創立が今どのような捉えられ方をしているか、見てみたいと思います。

女子大学 HP の「大学紹介」の項目には、「1876 年」という年号が真っ先に出てきます[12)]。ですが創立者については「ミッション」「スタークウェ

ザー」あるいは「デイヴィス」ではなく、「新島、八重、スタークウェザー“ら”（引用符は筆者付す）」という、主体となった人物を特定しない、ややぼかした記述になっています。これは「同志社と言えば新島」という読み手の期待や、「新島襄」「新島八重」というネームバリューに配慮した結果かと思われます。

同じ女子大 HP の中の「歴史年表」のページ[13]を見てみますと、1876 年に女子塾開始の旨が記されていますが、スタークウェザーに「校長」などの肩書は無く、ここでも新島八重が並列されます。八重の女子塾への関与については、授業の一部を担当したことなどは知られていますが、スタークウェザーと並べて「共に女子塾を始めた」とするのはややオーバーな記述と言わざるを得ません。

1877 年には「同志社分校女紅場を開設、校長新島襄」と、ここで明確に「校長」の語が出てきますので、この記述に基づけば新島襄が「初代校長」と読めます。

同じく女子大 HP の学校生活の紹介で、礼拝についてのページ[14]を参照します。ここでは「特別な礼拝」として創立記念礼拝が挙げられています。これは「EVE の開会礼拝として」という説明があるように、11 月 29 日を創立記念日として行われる礼拝です。女子中高が 4 月に女子部創立記念礼拝を行い続けてきたのとは違って、こちらには 10 月に礼拝を行っている旨の記載はありません。

「歴史概要」として、女子大の歴史を紹介するページ[15]を見てみましょう。冒頭は「1876 年～1877 年「女子塾」時代」となっています。歴史の始まりをやはり 1876 年に置いているということが窺えますが、「「女子塾」の開設を進めることになります……」という記述の主体は新島自身であるように読み取れます。「女子大の起源は 1876 年旧柳原邸の『京都ホーム』という女子塾」ということは明言されていますが、「スタークウェザーを中心に、八重も教鞭をとっている」とし、創立主体が誰であるかはあまりよく分かりませ

ん。またその記述のすぐ後に置かれた画像は、新島夫妻のものです。その新島夫妻の写真のすぐ下には、八重が女子塾で教育を担った旨が書き添えられています。

さらにその下へスクロールしていくと、ここでようやくスタークウェザーの写真が出てきます。スタークウェザーに関しては、「女子塾開設の中心になった A. J. スタークウェザー。米国の伝道団体より派遣され、ここで教鞭を執る」と記されています。「女子塾開設の中心になった」を「創立者」と解釈して良いかどうかは迷うところです。それよりも続きの「教鞭を執る」の方が、彼女の主たる活動として読み取れます。そうなると、ここでの記述は先の八重と並んだ「一教員」という位置づけでスタークウェザーを評しているようにも思われます。

続く「1877～1912 年『同志社女学校』時代」の項目では、1876 年に誕生した女子塾が「同志社女紅場」に「名称変更」したと書かれています。認可云々の話には触れられていませんので、この一文に拠れば「女子塾と同志社女紅場、それに続く同志社女学校は、名前が変わっただけの同じ学校」という解釈ができます。説明文は「校長に就任した新島襄は」と続きますが、「校長」の肩書は先ほどご紹介した「歴史年表」同様、ここで初めて使われています。

「1912～1949 年『同志社女学校専門学部、同志社女子専門学校』時代」の項目に参りますと、専門学校令によって女学校が再編されたことが記され、ここからは女子大の前身といえる「専門学部」のことに記述が特化されていきます。そして 1922 年、松田道が「女性初の校長として就任」と書かれています。これは専門学部の短い歴史に限ったこととしての意味なのか、1876 年以来初めてという意味なのか、受け取り方に迷うところです。もし後者であるとすれば、スタークウェザー以降の女性宣教師たちは、「実務的な現場責任者」ではあっても「校長とは呼べない立場だった」という理解なのかもしれません。

以上を踏まえて B 案についてまとめますと、まず創立年は 1876 年です。これは女子大のエンブレム（図参照）にもしっかりと刻まれていますので、

動かし難い認識であると言えます。一方、1876 年当時の女子塾開設の立役者であったスタークウェザーについては、「新島襄、新島八重」の後に続く存在としてその名が記されがちです。この「三番手扱い」は恐らく、「京都府の認可を始め、公に校長と呼べるのは新島であって、女性宣教師はそれを担うことはできなかった。だからスタークウェザーを含む女性宣教師たちは実務上の『校長』であっても、公の肩書として『校長』とは呼び難い」という認識に基づくものかと思われます。

同志社女子大学のエンブレム

そういうわけで、女子部の創立については諸説あるだけでなく、当の女子部の中で見解が分かれているというのが現状です。このことについては 1968 年の『同志社時報』において、当時の女子中高教諭であった窪田先生による文章において、すでに女子部の「内側」から指摘がなされています[16)]。ですが 1968 年のその指摘から半世紀が過ぎた今もなお、その齟齬は解消されていないということが、女子中高、女子大の現在の HP から窺えました。

「女子部」としての統一見解が無いこと、見ようによっては「分裂」とも取れるようなずれについては、解消されるのが望ましいのではないかと思います。しかし創立年と創立記念日のずれという大きな影響を及ぼす問題について、どこを落としどころとするべきか、難しい問題です。

加えて、女子中高、女子大、いずれにおいてもスタークウェザーの存在感が、記録の検証から分かってきた彼女の貢献に比べてかなり薄くされてしまっていることも気に掛かります。スタークウェザーの影が薄くなってしまうのは新島の存在感を前面に押し出したいという願望のせいかもしれませんが、実際のところはどうでしょうか。

女子部創立の起点をどこに置くか

これらの背景を子細に検証してこられた本井先生によって示される「落としどころ」のご提案は、「概ね B 案」というものです[17)]。女子大 HP が謳う通り、1876 年（B 案）が妥当であるとの判断です。すると開校場所は必然的に、旧柳原邸ということになります。「伝統」というものは 1 年でも長い方が箔も付きますから、そういう意味でも B 案にはアドバンテージがあります。また京都ホームのモデルとなった「神戸ホーム」においてもやはり、「神戸女学院」の前身である「神戸ホーム」の開設をもって学園創立としておられますので、これに倣っての扱いとも言えます。

ですが京都ホームが神戸ホームと違うのは、京都ホームは「ミッションによる女子塾」であり、その後の「新島襄」との繋がりが見えにくくなってしまうところです。

一種の「ブランド」としての「同志社」、同志社ファミリーとしての意識をアピールするには、この京都ホームを含む創立過程においても新島との繋がりを表に打ち出していく必要があります。

そこで A 案の 4 月 21 日設立案を勘案して、ここにきちんと結び付けて捉え直してみたいと思います。すなわち、ミッションの私塾であった京都ホームが、4 月 28 日の認可をもって「正式に同志社に引き取られ」、新島が「二代目校長」となった……という形です。本井先生はこの「新島が、同志社が、京都ホームを引き取った」というべき出来事を、「同志社ファミリーの養女として迎え入れた」とも表現しておられます[18)]。

ただ、養子と言っても全く血の繋がりが無いわけではありません。デイヴィスにせよスタークウェザーにせよ、新島とは同じアメリカン・ボードに連なる「同僚」であり、大きな意味で「志」は同じです。「引き取った」と言っても全く違う家に養子に行ったわけではなく、近い親戚と言いますか、「同志社ファミリー」内での「預かり」のような形です。先に「モデル」として挙げた「神戸ホームと神戸女学院」が連続した一体の学校であるように、京都ホームと同志社女学校も、そこに流れる「DNA」は一致している、

と言えるのです。

ですから、1877 年 4 月 28 日付で認可された「同志社分校女紅場」は京都ホームの「続き」、後身と見て問題はありません。両校は精神的にも内容的にも繋がっているためです。そして、両校には不可分な繋がりがあるという認識に立てば、創立者や責任者、初代校長を「スタークウェザーである」としたところで問題は生じません。それは「同志社や新島とは全く切り離されて無関係に創立されたものである」ということにはならないからです。

まとめますと、同女は 1876 年 10 月 24 日、デイヴィスやスタークウェザーによってミッションスクールとして、すなわちスタークウェザーを校長格として創立され、その半年後に新島襄が校長となって、これを同志社に吸収した……と結論づけることができます。

筆者の立場から①　前向きに「創立記念日を改める」には

ここまで、女学校の創立を巡る認識の幅と、本井先生の説に基づく「落としどころ」をご紹介して参りました。最後に私、工藤の現在置かれている 3 つの立場を通して、この問題に対して感じるところをいくつか述べてみたいと思います。

私が日頃身を置いている中学校・高等学校という現場では、学校の歴史というものに注意を払う機会はそう多くありません。日々の授業や HR 運営に追われる日々の中で、所属校の歴史を振り返るということの大切さを理解しつつも、これまであまりじっくり考えることがありませんでした。

一方で、現場にいるからこそ、この種の研究に対して思うところもあります。今回のテーマで言えば、「今やっている行事が否定されるということになると、なんだかんだ反発もあるかもなぁ」というぼんやりとした危惧です。つまり、ここで結論として「概ね B 案を採用する」となれば、一番混乱を生じかねないのは当然女子中高だということを思うわけです。

ただ、これまで女子中高が立脚してきた A 案（1877 年 4 月 21 日説）に

ついては、年号はともかく日付にはほとんど論拠が無いということが明らかになっています。古くは 1897 年からこの案に基づく周年記念行事が行われているとはいえ、それは「事実誤認に基づく伝統である」ということは認めざるを得ません。

しかし、「事実誤認だから正せば良い」という単純な話とも言い難いのです。学校現場というのはたくさんの人が絡む場所でもありますから、「頭で割り切れる話」よりも「感情的に揺さぶられる話」の方が影響力を持つことだってあるわけです。

「新たに分かってきた歴史的事実に基づいてこれまでの『伝統』を修正したい」という時に、どうすればより抵抗を少なくして受け入れてもらえるか。そのためには、「訂正ではなく更新、アップデート」というような「前向きな形」と捉える工夫が必要であろうと思います。

さらに、これが「女子中高対女子大」というような形にもなって欲しくないと思うわけですが、この点においてはすでに解決の兆しが見えている気がいたします。同志社同窓会、すなわち女子部の OG 会の HP にそれが見て取れます。この会長挨拶において、2021 年が「スタークウェザー没後百年」として取り上げられています[19)]。ここでは「実質的に最初の校長として同志社女学校に赴任したスタークウェザー」と、かなり丁寧な言い回しで書いてくださっていますが、ここには本井先生の仰られた「B 案」への重心の移動が窺えます。「実質的に最初の校長」としてスタークウェザーを評した文章が記されているのは、先に見てきた女子中高、女子大の HP の記載に比べると、大きな変化と言えるでしょう。

これをお書きになっている会長は、女子大のご出身で、かつ長年女子中高でお働きになった三好三恵子先生です。女子大にも女子中高にも深い思い入れをお持ちである方がこのように書いてくださっているのですね。

この同志社同窓会の HP では、「同窓会のあゆみ」として、同窓会の歴史年表が掲載されています[20)]。こちらを見ますと、1876 年のところに「「校長」スタークウェザー」と記されています。カギカッコ付きという配慮を感じる形ではありますが、スタークウェザーの名前の前に「校長」の語が付け

られているのです。

さらに歴史年表をたどりますと、2001 年、2006 年に、それぞれ「女子部創立百二十五周年、百三十周年」の記念として、女子中高、女子大学へのお祝い金を送る計画があったと記録されています。女子中高はすでにここで「1876 年案」の方へ招き入れられていたのですね。

これらを見て参りますと、女子中高も含め、ほぼ「1876 年案」で見解はまとまっていると言えそうです。あとは何をきっかけに、どのようにして「4 月 21 日説」から「前向きに」離れるかということです。

「下手の考え」で思い付くこととしましては、「祝祭ムード」こそが前向きさの良い支えとなってくれるのではないか、ということです。「新たな祝い事、新たな記念日ができた」という形で「1876 年 10 月 24 日」説へ移行すれば、「正す」という空気感は薄まることでしょう。

先の同窓会会長ご挨拶にもあった通り、幸い今年はスタークウェザー没後百年という非常に意味深い節目の年であることが分かっています。これを機にスタークウェザーの功績を讃えていくというのは、前向きなメッセージとして捉えられることと思います。

「新島の影が薄れてしまう」という懸念はあるかもしれませんが、「初代校長」と比べて「二代目校長」が劣るというものでもありません。どこまでいっても「同志社ファミリー」にとって新島は「校祖」と呼ばれる揺るぎない立場であるわけですから、むしろ女子部の特権として、このスタークウェザーを顕彰していくことはプラスであるように感じられます。

何より「女子部だからこそ」、この単身海を越えて来た独身女性宣教師スタークウェザーを顕彰することに大きな意味を見出しやすいと思うのです。

今夏開催されたオリンピックでは、その事前のあれこれを巡って、この日本社会における「女性蔑視」の風潮の未だ根強いことが露見しました。まだまだこの社会の中には「男性がトップであり、女性はそれに従属する存在」という意識がしぶとく生きているわけです。

そういう意味では、「新島によって作られた女学校」ということに固執したくなる我々の中にも、もしかしたらそのような権威主義、あるいはミソジ

ニー的な感覚が少なからずあるのかもしれない、とも思うわけです。

新島襄と比べて世間的に知られた人物ではない、無名の外国人女性宣教師。その彼女が、新島と対等な立場で、あるいはそれをリードするような形で女子教育を導いた……というのは、私にとっては非常に励まされる母校の歴史だと感じられます。

「日本人男性」というマジョリティ的な要素に依拠しない、そんな創立史というのは、かえって今の時代だからこそ見詰め直す価値があるのではないか。むしろそれを強く打ち出していくところに積極的なメッセージが見出し得るのではないか。そのように思います。

筆者の立場から②　新島の女子教育への関わり方

次に、私の「教務教師」という立場から感じたことを述べてみたいと思います。

新島は実はあまり女子教育に積極的ではなかった、と、彼の関与の低さを指摘する声があります。

それに対して本井先生がお書きになった一文が、私としては腑に落ちたというか、もっと言えば慰められたようなところがありました。

「その一方で、新島の周辺では大学設立運動、全国伝道、さらには教会合同運動、といった大きな出来事が続出します。とても女学校までは手が回りきらない、という状態でした。そのうえ、彼自身、もし女子教育が不得手、とくれば、新島に多くを期待する方がそもそも無理ですよ、ね。」[21)]

この、「精神」は十分にありつつも「実働」が乏しくなってしまうのは、新島も一人の人間であったという個人の限界を垣間見る思いがして、私としては慰められます。私にも「実働」の少なさに対して後ろめたく思うところがあるからです。

私は日本キリスト教団の教務教師という立場ですが、日頃は「一教員」として働いています。日本キリスト教団の「教師」という、いわゆる「牧師職」としての私の経歴は、同志社香里に勤めると同時にスタートしておりますから、私には教会で専属の牧師として働いた経験がありません。「学校勤

めの牧師」である私は、聖餐式や洗礼式といった、聖礼典を執り行うこともありません。もちろん、自分としては、学校での働きが福音宣教の業だと信じて、召命感を持って努めております。けれども、やはり見る人によっては「それでも牧師か」というようなご批判を受けることもあります。

教会での奉仕が不十分なのは私自身の努力不足、能力不足という点も大いにあります。ですが、「直接的に関われないから『やっていない』」と断定されてしまうのは、ちょっと辛いものがあるなぁ、という心持ちもあります。

そのことと、新島の「女子教育に積極的に関わるところまで手が回りきらなかった」ということが、何となく重なるような気がしてしまいました。十分志はあったし、間接的かもしれないけれどそれを大切にしていた、という辺りで皆さんお納めください……という思いです。

筆者の立場から③　同じ「養子」としての香里中高と比べてみて

最後に「香里中高」に属する者として感じたことです。実はこれも本井先生が御本の中で言及してくださっていますが、学内諸学校のうち、「別に創立された学校が吸収合併された形」で同志社に連なった学校として女子塾とよく似た過程を辿ったのは、香里中高なのです[22)]。女子中高出身の私が、香里中高に勤め、この女学校の歴史について発表するというのは、不思議な綾を感じます。

香里中高は「同志社香里」としての歴史をどう自覚しているか、ということを、これもまたHPにおける「学校沿革」を見てみますと、「前史」と「同志社史」に二分する形で記載しています[23)]。

香里中高の場合、女子部と違って「前身」となった香里学園の「DNA」は、同志社と全く繋がりの無い「他人」のものです。何しろ前身は「偕行社」という陸軍軍人の子弟を預かる軍人養成学校です。これは女学校とは根本的に異なる「養子縁組」と言えます。ですから、女子部のように「前史」を連続したグラデーションとして今に繋げることはできません。1951年の

「吸収合併」をもって「同志社の一員へと『入れてもらった』」のが香里中高です。

当然その「養子縁組」には摩擦や衝突が大きくあったようです。しかも興味深いことに、この吸収合併の際に、生徒はもちろん、教職員も、前身校からの者が多数そのまま在籍しているのですね。少し前まで「天皇陛下萬歳」「お国のために」と言っていたはずの学校の人たちが、今度は聖書を読み、讃美歌を歌って礼拝せよと言われるわけです。まさに 180 度と言っていい転換ですから、当然反発も大きくありました。

そのせいでしょうか、この合併の混乱期に校長を務めた「同志社香里初代校長」の「山田貞夫」の肖像画は、なんと礼拝堂である香真館という建物の上手側に飾られています。この肖像画は、山田校長退職を記念して作られたものだということです[24)]。そして下手側に新島襄の肖像があります。普通は新島を上手側に置くのでは……と、私は長らく疑問に思い続けているのですが、礼拝堂献堂当時の記録を見てもやはり同じ場所に同じ肖像画が飾られているようですので、これは献堂以来そのまま、ということのようです[25)]。

ではそれほどまでに「合併時」への切実な思い入れがあるのかと言うと、香里中高では「合併記念日」はほとんど全くと言っていいほど意識されておりません。これは、女子中高が 4 月 21 日を記念し続けてきたのとは対照的です。香里中高の方にも、「合併記念日」は調印の日か、「同志社香里」としての授業開始日か、あるいは山田校長就任の日か……など、日付案は複数ありますけれども、そのどれかにこだわりを持っている人の話は聞いたことがありません。一連の出来事は 1951 年 9 月前後に起こりましたので、たまに「同志社香里発足」の周年行事が行われる際には、この 9 月から 10 月辺りに行っていることが多いようではあります。

そういうわけで、香里中高では「創立記念日」といえばただもう 11 月 29 日です。でもこれは悪いことではなくて、「同志社香里」が「香里中高」ではなく「同志社」の一員として、その「精神的 DNA」を確認するという意味で、揃ってこの日を祝うことの方が有意義だろうと思います。

また最近では法人部を主体に「同志社の一貫教育」ということが以前より

強く打ち出されているように感じております。その意味においても女子部や香里中高を含めた「同志社ファミリー」が、「家族の記念日」として 11 月 29 日を祝うことは、一層大切なことになるのかもしれません。

おわりに

女子部において、「新たな記念日を祝う」という前向きな意味をもって「1876 年 10 月 24 日創立」という歴史を新たに継承していくこと、併せてスタークウェザーというこれまであまりスポットの当たって来なかった事実上の立役者を「女子部の目指す、ひとつのモデル的女性像」として立ち上げていくことは、大変有意義ではないかと思われます。

今回の「一日研究会」プログラムの企画主旨の文章の中に、「コロナ禍でキリスト教主義学校の果たすべき役割がますます大きくなっている。人間がキリスト教命題の一つでもある『利他的行動』をとることができるかどうかにかかっている」という一文がありました。

スタークウェザーの生き方というのもやはり一つの、利他に生きた、神からの召命に答えた女性の生き方だと言えます。新島やデイヴィスや、たとえば M. F. デントンなどもそのような人たちでありますけれども、この機に同志社における女子教育の先駆者として尽力したこのスタークウェザーにスポットを当てることは、これからの同志社の女子教育の中で育っていかれる生徒、学生の皆さんにとって良い感化を与えるものとなるだろう……と感じております。

また、それを可視化して共有するためにも、スタークウェザーの肖像画なり記念碑なりが作られても良いのかもしれません。香里中高のように礼拝堂の上手に飾られることはなくても、そういうものが記念として作られることが、前向きな再スタートのしるしとして、新たな伝統の共有の礎となるように思います。

注

1）本井康博、『千里の志　－新島襄を語る（一）－』（思文閣出版、2005 年）、p.79。

2）本井康博、『「同女の母」スタークウェザー　－同志社女学校の始まり－』（同朋舎新社、2021 年）、p.57。女子部創立を巡る諸説については本井氏の複数の文献に重複して記述があるが、この論考では以下、最新の著作であるこの本に概ね基づく形で参照する。
3）同書、p.73。
4）同書、p.79。
5）京都府立京都学・歴彩館 HP　デジタルアーカイブより、
http : //www.archives.kyoto.jp/websearchpe/detail?cls = 371_chronicle&pkey = 0000020197
6）前掲書、p.84。
7）同書、p.10。
8）同書、p.65。
9）同志社女子中学校・高等学校 HP、「こむらさき通信」
http : //www.girls.doshisha.ac.jp/blog/
10）同上、「学校案内」より、「創立者新島襄と同志社」
http : //www.girls.doshisha.ac.jp/schoolguide/establishment.php
11）窪田哲三郎、「女子中・高校の創立記念日」『同志社時報』第 29 号（1968 年 3 月）、p.56。
https : //www.doshisha.ac.jp/attach/page/OFFICIAL-PAGE-JA-433/141207/file/29Austoria.pdf
12）同志社女子大学 HP、「大学紹介」https : //www.dwc.doshisha.ac.jp/about
13）同上、「大学紹介」「沿革」より、「歴史年表」
https : //www.dwc.doshisha.ac.jp/about/history/chronology
14）同上、「在学生の方へ」より、「宗教部＞チャペル・アワー（礼拝）＞特別な礼拝」
https : //www.dwc.doshisha.ac.jp/current/chapel_news/chapel_hour/special
15）同上、「大学紹介」「沿革」より、「歴史概要」
https : //www.dwc.doshisha.ac.jp/about/history/overview
16）窪田哲三郎、「女子中・高校の創立記念日」『同志社時報』第 29 号（1968 年 3 月）、p.56。
https : //www.doshisha.ac.jp/attach/page/OFFICIAL-PAGE-JA-433/141207/file/29Austoria.pdf
17）本井康博、『「同女の母」スタークウェザー　－同志社女学校の始まり－』（同朋舎新社、2021 年）、pp.58-59。
18）同書、p.23。
19）同志社女子大学・女子中学校・高等学校　同志社同窓会 HP、「同窓会について」

「会長あいさつ」より「会報 61 号　会長挨拶」https : //www.dojo-doso.org/about/

20）同上、「同窓会について＞同窓会のあゆみ」
https : //www.dojo-doso.org/about/history/

21）本井康博、『ハンサムに生きる－新島襄を語る（七）－』（思文閣出版、2010 年）、p.154。

22）本井康博、『「同女の母」スタークウェザー　－同志社女学校の始まり－』（同朋舎新社、2021 年）、p.15。

23）同志社香里中学校・高等学校 HP、「学校沿革」
https : //www.kori.doshisha.ac.jp/sg/history

24）林　彰「山田先生の肖像画と中堀先生のこと」『香里の丘』第 95 号（1988 年）、p.14。

25）阿南里士「同志社香里中高礼拝堂改築について」『同志社時報』第 64 号（1978 年）、p.62。
https : //www.doshisha.ac.jp/attach/page/OFFICIAL-PAGE-JA-388/140710/file/64shokai.pdf

参考文献

※電子情報については全て 2021 年 8 月 6 日取得。

阿南里士「同志社香里中高礼拝堂改築について」『同志社時報』第 64 号（1978 年 7 月）。

林　彰「山田先生の肖像画と中堀先生のこと」『香里の丘』第 95 号（1988 年 12 月）。

同志社香里中学校・高等学校『同志社香里五十周年記念誌　－語り継ぐ五十年の歩み－』、（2001 年 11 月 10 日）。

窪田哲三郎「女子中・高校の創立記念日」『同志社時報』第 29 号（1968 年 3 月）。

本井康博、『千里の志　－新島襄を語る（一）－』（思文閣出版、2005 年 6 月 1 日）、p.79。

本井康博『「同女の母」スタークウェザー　－同志社女学校の始まり－』（同朋舎新社、2021 年 10 月 4 日）。

本井康博『ハンサムに生きる－新島襄を語る（七）－』（思文閣出版、2010 年 7 月 6 日）。

本井康博『マイナーなればこそ－新島襄を語る（九）－』（思文閣出版、2012 年 2 月 1 日）。

本井康博『同志社を掘る　－創立百五十年に向けて－』（蒼穹社、2020 年 11 月 29 日）。

小野功夫「新島襄の肖像画を描いたとき」『香里の丘』第 94 号（1988 年 7 月）。
坂本清音「同志社女子教育　－その「知られざる」源流を尋ねて－」、「同志社ファン・レポート」第 310 号（同志社ファンを増やす会、2021 年 7 月 1 日発信）。
ポール・ボラー著、北垣宗治訳『アメリカンボードと同志社　1875-1900』（新教出版社、2007 年 2 月 23 日）。
同志社女子大学 HP　https : //www.dwc.doshisha.ac.jp/
同志社女子中学校・高等学校 HP　http : //www.girls.doshisha.ac.jp/
同志社香里中学校・高等学校 HP　https : //www.kori.doshisha.ac.jp/
同志社同窓会 HP　https : //www.dojo-doso.org/
京都府立京都学・歴彩館 HP　デジタルアーカイブ
http : //www.archives.kyoto.jp/websearchpe/